

## 地域と学校の文化・スポーツ活動

# 文化・スポーツ活動と実践者の人間の成長の統一を目指して

桑原 清

## はじめに

本分科会における報告は、全体で三本であった。①読書（図書）活動、②民舞の取り組み、③地方文化と地域問題、についてである。二〇一〇年度の分科会は、昨年度と同じくすべて文化活動についての報告であった。読書（図書）活動にかかわっている参加者が多いため、報告だけではなく全体の討議も昨年以上に深めることができたように思う。共通することを一言で表すとすれば、「人・地域と文化を統一させる実践」ということであろうか。

今年の三本の報告は、この数年来の本分科会の討議の成果を踏まえ、またはそれを発展させるものであった。①読書（図書）活動では、子どもたちが絵本や本に親しむにあって、教師自身が子ども集団とのかわりを密接にし、

組織化を強く意識した実践であった。昨年度は、はじめの図書担当ということから、まず子どもたちに絵本を好きになってもらい、手にとってもらおうということから始めたが、今年は様々な取り組みを行う中で、新たな課題が出てきたということ、つまり発展において総括すべきこととの遭遇である。②民舞の取り組みでは、地域の伝統芸能である「御神楽」を子どもが踊り手になることによって地域の人たちとの交流が深まっていくことの再認識についてである。③地方文化と地域問題では、道南地域の経営者団体（北海道中小企業家同友会）の人たちが落語・講談等の演芸を支えていくという、いわば地域づくりの新たな展開の提起である。

これらの三報告が提起していることは、①文化というものの担い手とそれを支えるものとの関係、②その際、文化活動を進めていく者の文化についての把握・価値意識の質の問題、③地域にどうかかわっていくかという実践の問題、と捉えることができる。

## 一 各実践報告の概要

### 1 ぜひ、子どもたちによんでほしい

#### 「絵本」第二章

森町立さわら小学校 渡辺 孝久

昨年の本分科会の推薦を受け、この夏に『全国教研』に参加し、「文化創造と教育」という分科会で報告を行い、自分にとってほんとうに意義がある体験をしてきた。学校の文化部に属し図書関係の仕事をするなかで、当然図書コーナーにいる機会が多くなって感じていることがある。昨年と比べると今年の方が図書コーナーに来る子どもが増えているように思え、子どもたちが思い思いに図書を手に取ってみている。そうしていると、なかには図書の整理を手伝うと言ってくれる子どもが出てきたり、「先生、この本おもしろいよ」ということを言っただけの本を子どもが増えてきたりして、教師とのコミュニケーションが本を通して密になったように感じている。

図書コーナーに来る子どもたちは、観察していると、ただ本を読みに来るというだけでなく、教師と話をしたい、話し相手になってもいいなといったことでも来る子どもも

多い。図書コーナーがいればコミュニケーションのための場になっていることが分かる。図書コーナーが廊下と区切りがないオープンスペースになって、そこに図書担当の教師（報告者）がいると話しかけてきたり、こちらから「どうしたの、元気ないようだけど」というように声をかけることもできるようになっている。オープンスペースとしての図書コーナーが本を読むということにしても、休み時間を過ごすにしても心地向い場所になっていると思う。その広く開放されたスペースで寝そべったり、友だちと話しながら本を読んだり、またはひとりで熱中して読んだり、思い思いの姿勢で過ごしている子どもがたくさんいる。今の子どもたちは、こちらから入っていかないと受け入れてくれない、心を閉ざしてしまうことがあり、読書しながら悩みを聞いたり話したりするなかで、教室だけではコミュニケーションをとれない現状を図書コーナーにすることで補うことができていると考えている。図書コーナーに行かないと子どもの様子がわからないと言っても過言ではないように思う。

図書コーナーにいると、子どもたちの読書傾向を知ることが出来る。子どもたちが喜んで読む本は、まず第一に「こわい本」が断トツである。二番目は、なぞなぞ・クイズの本。三番目は、スポーツ関係の本。サッカー・野球少年団に所

属していることも関係していると思われる。四番目が図鑑・百科事典類。これは総合的学習の時間に使われるもので、よく休み時間に調べものをしている。五番目は漫画本である。漫画といっても最近では名作ものも漫画化されているので一概に否定されるものではなくっており、内容によると考えている。やはり、怖いものが置かれている本棚はいつも借り出されていて空っぽという状態になっている。「怪談レストランシリーズ」「ぼぶら怪談クラブ」というものが人気があり、何回も同じ本を借り出している子どもも多く、読んだところ「そんなにおもしろいのかなあ」とも思うが、図書購入リクエストのナンバーワンなので一定程度は購入している。教師としての本音は、生きることの素晴らしさや心にしみる本、人間ってこんなによいとか、年齢を重ねても読みたい本というものを読んで欲しいというところにある。目の前にいる子どもたちはなかなか教師が手にとって欲しいと考えている本は手に取ってくれない状況にあり、そこがジレンマとしてある。勤務校の読書状況は、他の学校に比べて読書量が少ないと考えられる。だから、自分が取り組んでいることは意味があると思っている。

図書コーナー充実のための行っていることは、音楽室だった教室を改装した「まな部屋」（学びの部屋）で図書委員が読み聞かせ・紙芝居を行っていて、低学年が中心で一

五〇二〇名くらい熱心に聞きに来ている。次に新着図書の紹介、おすすめの本の紹介も力を入れている。本の帯カバーを切り取って写真やイラストを本の紹介に貼り付けたりして読みたくなるような工夫も図書委員が行うようにしている。

今後、ぜひ取り組んでみたいことは、保護者による読み聞かせを実施したいと思っていて、地域に開かれた学校の実現ということからもそうしたことが必要と位置づけている。もう一つ、本の紹介を図書委員だけが行うのではなく、先生方も行って欲しい、先生方のお薦めの本というものを図書コーナーにつくりたいと考えている。保護者の方をお願いするより、先生方にお願ひする方がハードルが高いかなとも感じている。学校現場の多忙化のため、困難はあるが是非実現したいと思っている。

## 2 互いに教え高めあう民舞「御神楽」

東川第三小学校 駒井 崇

学校の規模は、全校児童二三名の三クラス複式の学校で、五年前に転動してきた時は、学校が存続するかどうかという状況であった。東川町が移住者の宣伝等を行っていくなかで町に人口が増え、学校の周りに宅地を造成し、子育て世代が入ってきて学校の存続が可能になった。現在一七名

の子どもたちと学んでいるが、学芸会、運動会、町民文化祭等で第三小学校は「よさこい」を演じていて、地域の人たちは第三小学校といえは「よさこい」というイメージが定着している。高学年の担当をした際に、子どもたちに「今まで、よさこいを踊ってきたが、御神楽という踊りがある。

やってみないか。」と呼びかけたところ、「是非やってみない」という反応があり、職員会議ではすんなりと了解された。その時は、衣装はなく、Tシャツと短パン、手に持つ鈴のついた「錫杖」も手作りであった。それで学芸会は「御神楽」を踊って子どもたちも満足したという状況であった。しかし、翌年に地域から「なんてことしてくれんだ。こんな大事なことを地域に相談も無しに学校だけで決めるなんて。」という批判が加えられた。最初に行く時には、高学年の保護者には説明し了解を得たのであるが、その時にいたのが新しい住民だけであった。今までは地域との関わりが強かったということを実感したのである。二回目の時には、一年生から三年生までの低中学年の発達段階を考えると三年生が司会を行い一・二年生をリードし、高学年は「御神楽」を踊るということで学校の方針を理解してもらった。「御神楽」について言えば、いろいろな民舞があるが、秋田の「わらび座」が二十数年前に教育用につくった踊りでビデオに撮って配布、普及したものであり、「よさこい」

は洋風を取り入れたものであるのに対し、「御神楽」は完全に「和踊り」である。一部の筋肉だけ使うこともあり、一所懸命練習すると次の日に足腰が痛くなる。子どもの場合大人とは違って体重が軽いので大人ほどではないが、子どもにとつてもきついものであることはかわりがない。作文では、「とても大変な踊りなのでいつもへとへとになるまで頑張りました。だけどいつも最後まで声を出せずに終わり、今日もそうでした。」とあるように、踊ることだけで精一杯で、声を最後まで出し切れないきつさがあるハードなものである。そういうものであるだけに、やりきれた時の達成感は大きいと考えている。

二年目に、町民文化会で「よさこい」と「御神楽」を発表し、それを見た方々から「なかなか良かったのではないか」という評価をもらい、三年目には町の支出で衣装（袴だけ）をそろえることができた。五年目には袴と胴着を全部そろえることができた。また五年生が四年生に踊りを教え、六年生は「新御神楽」に挑戦することになった。構成上もいろいろな部分があり、それをどう組み合わせるのか子どもたちも自分たちで構成を考えることを行い、自分で頑張るところがはつきりしたものとすることができたと考えている。

四年生の子が作文で「間違えそうになったけど前のBち

やんを見て踊ることができた」ということに象徴されるように、一年目の踊りと二年目の踊りが違っており、子どもたちにとっても毎年新しい課題が出てくるというものであり、子ども同士の学びあいができるものと言える。教師は太鼓をたたくだけで子どもが教え合うということが今後続くことになると思う。

### 3 地域文化の後方支援

— 中小企業家同友会というもの —

道南落語倶楽部 荒井 到

道南地域で講談を行っている、そこにお客として来られるなかに、地元の中小企業の社長さんやその後継者という方が多いことに気づいた。そうしたなかで、中小企業家同友会の人たちとの出合いがあった。そこで大企業と中小企業との違いについて認識し、地域と中小企業との関係について感じたことを述べてみたい。

①中心になる人を頻繁に雇えるわけではない。大企業のように使い捨てはできない。そんなことをしたらまた一から社員教育をし直さなくてはならない。②その土地で営業するしかない。大企業のように他に逃げられない。例えば、本社が東京にある大企業にとっては函館支店は所詮は枝葉であるから、営業成績が悪ければ簡単に閉鎖できる。とこ

ろが中小企業はそうはいかない。函館の店をたむとすることは廃業を意味することになる。そういうことから、中小企業は地域の人間・暮らしを大切に、地域に受け込まないとやっていけない状況があるので、勢い地域文化というものに対する貢献度も高くなっていく。その集まりが中小企業家同友会というものであるということになっている。

同友会の活動の特徴についてまとめると以下のことが指摘できよう。第一は目的についてである。まず、同友会の目的というものをまとめると三つになる。①良い会社を作ろう、②良い経営者になろう、③経営環境を改善しよう。「良い会社を作ろう」「良い経営者になろう」ということは経営者の努力でなんとかなるが、「経営環境を改善しよう」ということだけは手を組まなければどうにもならない。そこで「地域の活性化」というものが出てくるのであるが、彼らは一応経済人なので、表に出てくるのは「地域経済の活性化」、つまりどれだけお金儲けができるかということになりがちになる。ただそのなかで文化的な色合いが濃いというものもあつたりする。たとえば従来の主要産業（鉄鋼・造船）からみれば不安定な産業と見られていた「観光業」の必要性を丁寧に説いていくというようなことをして、今の函館観光の興隆に貢献したということもある。

また、トラピスト修道院の方たちも同友会のメンバーに入っていて、文化的な行事を行っている人でも売店で売るといふ経済活動も行っている、そのマナー等を学びたいといふことが目的意識としてある。直接には文化活動を行うといふことではなく、いわば後方支援として文化的な存在を助けている、そういう面であつてはいるのではないだろうかといふ感覚を持つてゐる。

第二は経営についての近代化についてである。先代の社長といわば前近代的経営のために借金が増えていき、それに二代目が苦しんでいくといふ構造があり、そういう時の経営のアドバイスを中小企業家同友会が行つていく。

第三は人材確保と育成についてである。優秀といわれる人は大企業にいき、そうでない人が中小企業にいくといふ傾向がある。そうすると中小企業の場合は一から仕事を教えるといふことになり、中小企業の経営者の人たちは必然的に社員教育に熱心になつていく。そうした状況では、社長さんたちの中に、教育といふことは教えることではなく、共に育つといふことが正しいのではないかと考える人たちが出てくるようになってゐる。単なる社員教育を超えて、社会教育の領域にも入つてくることにもなるのではないだろうか。

第四は社風の確立についてである。一九九三年の「中小

企業家同友会総会宣言」では、二十一世紀型企業のあるべき姿について、①第一に国民と地域社会から信頼と期待に高い水準で応えられる企業、②第二に社員の創意や自主性が十分発揮できる社風と理念が確立され、労使が共に育ち合う企業、と謳われている。あるケーキ屋さんの「安全な食品を提供することでお客さんの信頼を得ていくことが私どもの務めです」といふ考えがある一方、夢というのはお金を得ることではほとんど成就してしまふといふ考えの方もいるというのが現状でもある。

職人技が機械によつて代替されるといふ技術状況にあつて、日本の文化を育てていこうといふ考えの経営者が全部ではないにしろいるといふ、文化の後方支援の分析を行つた報告であつた。

## 二 報告・討議から学んだこと

### 1 読書・図書活動は文化への入り口・成長の基礎

渡辺さんの報告を討議では、同じく小学校に勤務する参加者の方から読書をめぐる子どもの状況で共通することが多いといふことが話された。子どもの読書アンケートからは、低学年は図鑑(とりわけ男子はクワガタ、カブトムシ)、

中学年は怪談レストラン・怖い本、高学年は漫画、コナンのリクエラストが多いということが分かる。子どもたちは本を読むことに慣れていないので本を選ぶ範囲が狭くなっており、子どもたちに本を読んでもらうことは難しいことだなあとも感じている。居る場所がなくなってきた時にふらつと図書室に入つて来る子どもがいる。本が好きで図書室に来る子どももいるが、何となく来る子どももいる。だからいつも大人がいたらいいと思う。教師が図書室に行くことができる時間は限られているので教師以外の大人がいつもいる図書室であればと思う。本を広めるということでは昼休みの放送の時間を使って本の紹介、本の一部を読むことを行っている。またなかなか図書室に來ないので、図書分室(低・中・高)をつくり、図書室から本を持っていったりしている。手元にあると見たり、読んだりしてくれる。でもなかなか本を読んでくれないということが悩みとしてある。お母さん方のサークルが読み聞かせに入ってきてくれていて、その方たちが読みきかせたい本を買うようにもしている。渡辺さんの報告にあったような本の紹介を取り入れたいということも最後に述べられた。このことも含めて、討議で出された成果は、第一に、子どもが本に親しむために必要な手立てをしつかりと整えるということ、ハード面として学校図書館に常時大人が話し相手としている

ことが不可欠であるということである。

第二に、学校に通ってくる子どもたちの状況の深刻さや教師の多忙化を逆手にとつて、授業と結びつけたあり方の意識化が必要であるということ。そのためには、道内外の実践から学ぶと共に学校や教職員組合での交流が重要になってくるということである。この問題については、来年度の課題として深められることを期待したい。

第三は、教師が読んで欲しい本と子どもが読みたい本が一致しないという問題についてである。それは、教師自身がほんとうに感動したものを・読みたい本の主張をすべきであるということに討議が収斂された。このことは、討議の最後に報告者の渡辺さんが「自分自身で楽しいものをしなればならないという言葉が新鮮であった」と述べたことに象徴されている。文化は自然には発展しない。文化は広がり・拡張性を持たないと文化として成熟しないと考えられる。学校の場合は、教師がその牽引車の役割を果たすことも相応しい存在なのである。

## 2 子どもの成長を組織することの意義

参加者から檜山座の御神楽の実践の紹介があった。駒井さんの報告と同じように、扇子、錫杖を持って踊るものである。勤務校では五年生になると御神楽を踊るようになる。

子どもたちに教える際に、ビデオをまず見てもらう、次に先生たちが実際に太鼓を叩く。ビデオを見た時と生の太鼓の音を聞いた時とは子どもたちの反応がまったく違い、直接伝わってくるものすばらしさに感銘を受け、「よし、やるぞ」という気分になってくる。教師が自分で踊りを身体で覚えて子どもの前で実際の音と共に子どもに教えていくことの大切さが実感される。日本の子どもの中には民舞というものがあつていて自然に入つていく、自分の身体を自分でコントロールできる心地よさ、心がしなやかになっていくということを感じている。駒井さんの報告と同じように、その動作ができていく自分を感じるができる。だからものすごく疲れて身体がバラバラになるような辛さはあるのだけれど、そこに自分をコントロールできていく心地よさを感じるということ、子どもはそうした過程を通じてひとまわり大きくなつていくことを実感できると思う。このことは読み聞かせの実践と共通するのだけれど、踊りも「止め」とか「溜」とか「間」というものがあり、そうした実践が子どもの成長にとつて大切であることはたしかなことと言えるだろう。

次に、この報告が切り拓いてきたものに注目してみたい。第一に、繰り返しになるが、子どもが実際に踊りを覚えていくことによつて、自分への信頼を高めていくことである。

第二に、友だちとりわけ学年の上の子どもたちを本手にし、励まされ踊りを習得していくことである。

第三に、今度はそれを下の学年の子どもたちに伝えていくということである。

第四に、地域との関係を切り拓き、紡いでいったことである。はじめ地域の古くからの住民の納得を得る形で出発したわけではなかった。子どもたちの取り組みや「御神楽」演舞の素晴らしさという生の成果に感動することから、地域が味方になっていったという経過がある。ビデオではなく「生の文化」が起点になり、そのことに凝縮される子どもたちの頑張りが了解されていったのである。文化を考える場合に、「直接性」「完成度」「成長の可視性」を要素に論議しても良いのではと考えさせられる討議状況であつた。

### 3 地域に支えられる文化とは

開口一番、今までにない報告、新しい文化論という声が上がつた。報告の新しき、優れているところとして、第一に、地域から人がいなくなつた場合、地域の文化が完全に継承されない、少数で頑張つてみてももしかしてその人たちもいなくなつたら完全に伝承が途絶えるということになるのではないか、という問題提起である。別の報告者が自分がかかわっている地域の取り組みを話された。地域が破



壊されていくと文化を創造・発展させることができないうことになる。地域芸能があったところでも、地域に働く場所がないので出稼ぎに行き、伝えられる人が地域にいなくなるということがおこっている。その中でも、地域の祭りなどでの伝統芸能の伝承を考えると、しっかりと学校でも伝統を受け継いでいく必要があるということの発言があった。過疎化が進む地域において、その地域が少ない人的資源の中で頑張っており、それによつてかろうじて地域文化が支えられているという状況は少なくない。しかし、それ以上に困難になるかもしれない。その場合には地域と地域文化はどうなるであろうかという問題提起を報告者の荒井さんを行ったのである。

第二に、人が地域からいなくなるということは地域にとつても文化にとつても決定的なことになるので、そうならないようにと考えているのが、「中小企業家同友会」であり、その取り組み分析を行ったのである。

討議では、「中小企業家同友会」とゆかりの深い人もおり、その理念についても紹介された。①お金を稼ぐということはもちろんあるが、最も大切に行っているのは「教育」ということ、会社の中で「人を教育」をすることが社会のためになるという考えで教育活動に力を入れている団体である。障がいを持つている人を雇用したり、儲ければ奨学

金を出したりしている。

また、人がいなくなることで文化との関係も興味深い提起がなされた。地域の文化講演会の講師として話をした時のこと。人がいなければ文化は成り立たないといわれるが、三人いれば文化活動はできる。人がいなくなるのを拾い出すのが文化ではないか。金をかけなくても、立派な舞台がなくとも文化活動はできる。今まで行政から金をもらって文化活動を行ってきたが、そういうものは当てにしない方がいい。自分のためにやるのだからむしろ金なんかいりませんと考えた方がいい。金がないというのを聞いてみたらクルマが二台ある。たかだかこの三十年の間に身につけてきた「文化」を捨てられないでいる。生きるということは金の使い方を考えるということである。金がなくても生きていける生活に変えていくことがないとこれからのエネルギー事情を考えると人間は生きていけなくなると思う。そういうことからすると、地域に人がいなくなっても金がなくとも文化は生き延びていくと思う。樂觀的に捉えている。文明は人間を便利にするものであり、文化は人を豊かにするものである。文化と経済性との関連をどうするかということが今後の課題でもあるであろう。

上ノ国の小学校の実践の紹介で、地域のお年寄りの聴き取りなどを四年生の「総合的な学習の時間」に行った。九

三歳の戦争体験をもったおじいちゃん、今の上ノ国ではない上ノ国を知っている七六歳の上ノ国小学校の卒業生から学んだ。また、食という点からすれば、ヨモギを摘んで餅をつくっていつて、それを自分たちのおやつとして食べる。また、おばあちゃんからご馳走になった「味噌餅」について、米からヨモギ、おそらく味噌まで自分たちでつくったものを学んでいく。そうしたのも文化かもしれないという気がした。子どもたちはいろいろな思いでそれを感じていく。そのおばあちゃんが今そういう生活をおくっているわけではないのだけれど、何かそのことが気になっていく。そうした授業を組んでいつている。こういう授業を行うと子どもたちは「昔の人たちで大変だったんだね」という感想を持つ。それに対して、「今あるものを手放さないで話を理解することに問題がある」とコメントが入る。それに対して「極論かなあ」との応答。文化・文明と人間との関係についての論争・追究は本分科会で続くことになるだろう。

最後に、荒井さんの報告に戻っていくつか押さえておきたい。①「中小企業家同友会」は、地域の教育・人づくりを地域の存続のために重要なこととしている。②地域を廃れさせないために、その地方の文化、伝統芸能を大切にする。③社員には地域の人たちに信頼されるための教育を徹底する。地域の人たちが豊かにならなければ自分たちも

豊かになれないという発想である。

この三つの報告・討議は、①文化と人間の関係、②それを踏まえた上での地域と文化の関係、に焦点化することができる。来年もこの点を発展させた報告・討議ができることを期待している。

(北海道教育大学札幌校)